詩編 22 編の黙想：救いを求める貧しい者の嘆きと賛美

詩編 22 編は十字架で主イエスが叫んだ言葉が冒頭に来る詩編で心に残るものです。歴史学的にイエスがこの詩編を語られたかどうかは断定できませんが（ルカやヨハネにはないし、「大声を出して息を引き取られた」ということが歴史的な核である）十字架の裏切り、絶望、見捨てられの中に神がおられた（イエスは神のみ子である）という信仰にとって、イザヤ 53 章と共に、重要な言葉です。神の沈黙、「蝕」の経験（神が遠く離れておられる経験、2，12，20、救いが感じられない、2、5、６、９、21、22）は多くの信仰者の経験でしょう。人間の力で信じようともがく人にとって、そのもがきのなかに親しく十字架につけられた神のみ子がいます、という信仰こそ慰めです。嘆きを訴える相手がいることは幸いです！１３のヘブライ語聖書が福音書の受難物語に引用され、その内、8 つが詩編から、その内 5 つが詩編 22 からです。「苦しむ者」「貧しい者」の立場からの嘆きの歌です。主イエスは十字架において、嘆く者と連帯されるのです。詩は 20 節以下、4 節で言及された「賛美」が前面に来てきます。23、24、26、27。苦難と救い、十字架と復活は神の救済の出来事として繋がっています。

１．新約聖書における引用

7-8 節　嘲笑→マルコ 15：29、9 節→マルコ 15：31-32、マタイ 27：43、16 節「渇く」ヨハネ 19：28「主イエスは何に渇いておられたのか？」黙想しよう。17 節「私の手足を砕く」口語訳「手と足を刺し貫く（RSV LXX)」ゼカリヤ 12：10→十字架での死、19 節→マルコ 19：24、27 節「貧しい人は飽き足りる」→マタイ 5：3，6　初代教会はイエスの苦難、十字架での刑死をこの詩編から理解、解釈し、この詩編はイエスの苦難の先取りと解釈されました。

２．神の遠さの経験

神のかたちに「人格」として創造された人間は、他者との関係、神との関係、そして、自分自身との関係に生きるものです。この詩編では、神との関係が疎遠になり、神ご自身が困惑・痛みの源である（2-3 節)、神の遠さの隙間に入り込む他者は彼を拒絶し（7-9 節)、攻撃する（13-14 節、17-19 節)、自分との関係では命の枯渇を感じています（15-16 節)。まさに、孤立無援、四面楚歌です。

３．主なる神に信頼する

神の遠さの経験の中においても、信仰者は神に呼びかけ（2-3 節、20-22 節)、神に「信頼する」のです。その信頼は過去の信仰者たちからの遺産です（4-6 節)。その信頼のゆえに、神、主なる神に呼びかけます。主なる神は「救い」だして下さいます（5、6、21、22)。神は「貧しい者」の叫びを**聴き、裏切らず、侮らず、さげすまないのです。**

４．苦難のただ中での賛美(hālal piel 形、təhilā)

「賛美」という言葉もこの詩編で心に響きます（4、23、24、26，27 節)。救いを求める祈りと救いへの賛美は信仰の両面です。コロナ惨禍の中、早く友らと相集い、祈り、賛美したいものです。

５．告げ知らせと「立ち帰り」

詩編の記者は、救いを求める貧しい者の嘆きを聴いて、救い出して下さる主なる神を「語り伝える」（23、31 節）のです。主権は主にあります。このような讃美と証に対応してすべての人が主のみもとに「立ち帰る」（シューブ　方向転換をして一歩踏み出すこと、新約聖書の「悔い改め」（メタノイア）の背後にある事柄である）ことが求められています。それは全人的であり、一回的であり、同時に、繰り返しです。こうして、個人の賛美は全世界の、死者も、まだ、生まれていないものまでも含む賛美となり、「集会」（qāhāl）の中での奉献と主の晩餐に与ることは、まさにこのような出来事の宣教行為なのです（26-27 節)。